

元定期票導入時に採用されたそうだ。その背後には行動範囲が広がれば経済行動の範囲も広がる、今まで行ったことがない地域に行くようになれば地域経済の活性化にも貢献する、という考え方があるようだ²⁾。

台北市で働いている30歳前後の人たちと話していて、そういうことか!と思ったのは、日本の会社と違って、彼らの勤務先は交通費を支給しないという話がかっけだった。以前、台湾の人たちは家族と過ごす時間を大切にしているので、すぐに帰れるように家の近くの職場に勤めると聞いたことがあった。しかし、職場までの交通費を自分で負担するのであれば、見え方は変わってくる。以前はプライベートの時間を大切にするための職住近接だったかもしれないが、とくに若者の給与水準の低さが社会問題の1つとして認識されている今日の職住近接は、給料からの持ち出しをできるだけ少なくするための切実な方略の意味をもつ。

ところが、台北市内の住宅価格は、賃貸価格も含め、東京23区と同等かそれ以上に高騰している。実際、相対的に家賃の安い新北市や桃園市、基隆市から台北に通勤する人たちで、通勤時間帯の捷運やバス、台湾鉄道はかなり混雑している。片道1時間以上かけて通う人も珍しくないそうだ³⁾。台湾といえばスクーターだが、山がちで雨の多い北部で、高速道路を利用できないスクーターでの長距離通勤は負担が大きすぎる。また、交通事故の多さもスクーター通勤を避ける一因になっている。そういった人々にとって、定額乗り放題のTPASSは実にありがたい制度に違いない。

もちろん、私もその恩恵を存分に享受している。私が通う大学は新北市の山寄りにある。賃貸物件を探すにあたり、不動産会社の人は、「あそこはどちらかというリゾート地ですね。ある程度便利に生活はできますけど、近くに住むと台北市内にはほとんど出てこなくなりますよ」と評した。台北周辺で暮らす人々の生活を、旅行客とは違った視点で観察したいし、別の大学に通う大学生とも話したい。休日にはあちこちに出かけたい。大学周辺に引きこもって暮らすのは私には無理だろう。とはいえ、前述のとおり、台北市の住

宅価格は高騰しており、捷運の駅に近い比較的新しい公寓(集合住宅)の家賃はとて払えない。悩んだ結果、台北市の端っこに部屋を借り、大学へは1時間弱かけて通うことにした。したがってTPASSはフル活用している。

それ以外にも冒頭に述べたように、週末、ふらっとパンを買いに出たりできるのはTPASSのおかげだ。中秋節にはバスで少し遠い公園まで出かけて、烤肉(バーベキュー)を経験した。芋圓を食べながら日暮れを待ち、赤提灯に照らされた路地の写真を撮った九份へも、海岸沿いに広がる奇岩を見ながら歩いた野柳地質公園へも、観光客慣れした猫があちこちに落ちていた侯硐へも、TPASSを使って行った。台北市で一番高い山、七星山でのハイキングの帰りに乗ったバスは残念ながらTPASSの対象外だったが、金牛角(台湾風クロワッサン)で知られる三峡へも、臭豆腐の香り漂う深坑へも、TPASSを利用して、ふらっと出かけることができた。

おかげで行動範囲が広がり、台北周辺の地理や生活についても知識が増えている。日本にもこういう仕組みがあったらいいと思う。

1) 臺北大眾捷運股份有限公司「TPASS 行政院通勤月票 / 臺北桃都會通」<https://www.metro.taipei/cp.aspx?n=CEF54168B23F73B4&s=BB3631329CC1A297> (2024年1月25日最終閲覧)

2) 中時新聞網「1280 經濟學 背後の秘密」2019年4月15日工商時報 <https://www.chinatimes.com/newspapers/2019041500196-260202?chdtv> (2024年1月25日最終閲覧)
民視新聞網「1280 吃到飽」經濟學 刺激沿線地區消費力道」2019年4月15日 <https://www.ftvnews.com.tw/news/detail/2019415F06M1> (2024年1月25日最終閲覧)

3) 何度か転職を経験した若者は、家が職場から遠い場合、通勤が負担になるだろうと判断され、採用されないことがあると話していた。

てらさき・さとみ 法政大学キャリアデザイン学部教授。
最近の主な論文に「社会経済的背景からみる子育ての様子——「幼児期の家庭環境と保護者の養育態度に関する調査」の基礎的分析」『法政大学キャリアデザイン学部紀要』第19号, pp. 93-116 (2022年)。教育社会学専攻。